片山廣子の短歌――東洋英和女学院への寄贈本から見えてくるもの――

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程1年　清水麻利子

キーワード

片山廣子　短歌　東洋英和女学院　寄贈本　翻訳家　芥川龍之介

要旨

『心の花』の歌人、片山廣子は、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られる。森鷗外、上田敏、菊池寛らからその実力を高く評価された。廣子は、一時期は翻訳も短歌を詠むことも止める。翻訳本以外には、『翡翠』『野に住みて』の時を隔てた二冊の歌集と随筆集『燈火節』しか残っていない。

廣子は、芥川龍之介、室生犀星、堀辰雄、市川左団次らと、豊かな交流を持つ。芥川の最後の恋人「越びと」として見られがちな廣子であるが、自己の内面を凝視した、古びない感性を持つ短歌は、十分に理解と評価をされてはいない。

二〇一四年三月、東洋英和女学院史料室所蔵の「片山廣子氏寄贈本」百十四冊を閲覧させていただいた。これらの蔵書からは、短歌の特質を形作った思想や人柄と、片山廣子の短歌の世界が見えてくると考えるものである。

目次

一　はじめに　――　片山廣子と東洋英和女学院
二　芥川龍之介　――　「越びと」へ送られたエール
三　堀辰雄　――　創作ノートとしての短歌
四　与謝野晶子　――　「匂ひやかなる」距離
五　佐佐木信綱　――　変わらぬ慕情
六　古典文学　――　とらわれず生きる
七　片山廣子　――　野へ向かう心
八　その他の人と作品　――　歌の変貌
九　まとめ　――　「寄贈本」から見えてくるもの
十　資料（片山廣子氏寄贈本）東洋英和女学院史料室だより№67

一　はじめに　――　片山廣子と東洋英和女学院

「心の花」の歌人、片山廣子は、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られる。森鷗外、上田敏、菊池寛らからその実力を高く評価された。「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子は東洋英和女学院の後輩である。花子は同じ寄宿舎の柳原燁子（白蓮）と共に、歌人佐佐木信綱に師事する。信綱の紹介で片山廣子と出会い、本格的に翻訳を始める。一方、廣子は、一時期は翻訳も短歌を詠むことも止め、翻訳本以外には、『翡翠』『野に住みて』の時を隔てた二冊の歌集と随筆集『燈火節』しか残されていない。

片山廣子は明治十一年（一八七八）二月十日、東京麻布三河台に誕生。外交官の父吉田二郎はイギリス総領事となる。母かんは吉田家長女。両親はニューヨーク、ロンドンと海外勤務で留守になることもあった。十歳の時、東洋英和女学校予科二年に編入。妹つぎと寮生活を送る。十七歳で卒業後、竹柏会に入門。創設期の歌人として、活躍をする。二十一歳で大蔵省勤務の片山貞次郎と結婚し、二児をもうける。病弱であった夫の看病が続き、大正九年に死別している。大正五年の第一歌集『翡翠』の後は、翻訳に没頭してゆく。

廣子は、芥川龍之介、室生犀星、堀辰雄、市川左団次らと、文壇歌壇を越え、豊かな交流を持つ。芥川の最後の恋人「越びと」として見られがちな廣子であるが、その内面凝視の古びない感性を持つ短歌は、十分に理解と評価をされているとはいい難い。

平成二十六年三月二十九日、東洋英和女学院史料室所蔵の「片山廣子氏寄贈本」百十四冊を閲覧させていただいた。許可を得て本論文の作成となり、感謝申し上げたい。**資料から、片山廣子の短歌の特質を形作った、思想や人柄が見えてくるのではないだろうか。**

東洋英和女学院史料室所蔵の「片山廣子氏寄贈本」は、史料室だより№67（1）の保坂綾子氏〈東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」について〉によると、受け入れの詳細は残っていないが、生前寄贈のものと、昭和三十二年（一九五七）逝去の後に、遺族により贈られたものとに分けられる。蔵書印から、中高部の図書室で一般貸出されていたが、一九八〇年代前半頃から貴重書として保管され現在に至る。保坂氏は、「寄贈本をあらためて見てみると、文壇のそうそうたる人物の著作や翻訳作品が並ぶ。佐佐木信綱、芥川龍之介、堀辰雄、與謝野晶子、川田順、らの著作や歌集、堀口大學、森林太郎（鷗外）の翻訳作品など、挙げればきりがない。なかには片山廣子へあてた著者署名入りの本もあり、歌人・文学者として歩んだ廣子の交友関係を垣間見るようである。」と述べている。廣子の蔵書のうち洋書は、松村みね子の名義で日本女子大学図書館へ寄贈されているという。イェーツ、シングなどのアイルランド文学の翻訳家としての業績が光る。

年譜においては、藤田福夫「増補片山廣子年譜と明治大正期作品抄」（2）と、片山廣子　松村みね子『野に住みて』（3）を参考にした。また、短歌の引用については、主に秋谷美保子『片山廣子全

歌集』（4）に拠るものである。以下この論文では、寄贈された本の著者毎に、寄贈本を巡っての廣子の文学的意識の有り様と深まりを分析してゆく。

＊引用文は新字体に改めた。

二　芥川龍之介　――「越びと」へ送られたエール

芥川の寄贈本は、以下の七冊である。

（発行）（発行年月日　特記事項　片山印　）＊年数は資料の算用数字のままとする。

『羅生門』　阿蘭陀書房　1917・T6・5・13　献辞入りの名刺

『羅生門』は、初期の短編小説を集めたもの。「おひまの節およみ下さい　芥川龍之介　片山様　粧次」の名刺が添えられている。

『影燈籠』　春陽堂　1920・T9・1・28

『春服』　春陽堂　1923・T12・5・23（第4版）　装幀、小穴隆一。

『黄雀風』　新潮社　1924・T13・7・18　献辞・署名入　装幀、小穴隆一。

『黄雀風』は、第七短編集。内扉に、「黄雀風　著者　片山様　惠存」と書かれる。

『百艸』　新潮社　1924・T13・9・17　献辞・署名入

『百艸』は、内扉に「著者　片山夫人　惠存」の献辞がある。

『支那游記』　改造社　1925・T14・11・3

『梅・馬・鶯』（芥川龍之介随筆集）　新潮社　1926・T15・12・25　献辞・署名入

『梅・馬・鶯』には、表紙見開き左ページに「作者　松村み祢子様」と大書される。この本には、芥川が書いたのか、他には書き込みをしない廣子なのか明確でないが、鉛筆書きと思われる書き込みが二箇所ある。

四四〇頁　寄内

ひと向きに這ふ子おもふや笹ちまき（たすら）

（澄江堂句集）ひたすらに這ふ子・・・

澄江堂句集は昭和二年九月、没後自家版として刊行。

四四四頁　鵠沼

かげろふや棟も落ちたる茅の屋根（沈め）

（澄江堂句集）棟も沈める・・・

手直しされ、写実から思いの表現へ時間的空間的な広がりに、抒情性が深まっている。

廣子は、蔵書の『梅・馬・鶯』と芥川について、随筆集『燈火節』（5）に次のような感慨を述べている。「女人短歌」（第二巻第三号一九五〇・九）初出。

先日、「うめ　うま　うぐひす」といふ芥川龍之介随筆集を読んでゐた時、ゲェテー座のサロメを見物に行くところで、夕がた何処かの坂の中途で作者が、闇の中に明るい花屋のガラス窓を見るくだりがあつた。（中略）これは、山手の坂のあの同じ花屋であることは確かである。妙に嬉しい心もちがしたと作

者がいふところで私も妙にうれしくなつて、菊の花の群がつた上に漂つてゐる煙草の煙の輪を、私も見たやうな錯覚さへもち始めた。「夢のふるさと」といふやうな言葉でいふのはまはりくどいが、静かなおちつきの世界を芥川さんも私もおのおの違つた時間に覗いて見たのであつたらう。

廣子と芥川が「静かなおちつきの世界」を共に見たのは、軽井沢という都会の喧騒を離れた特別な空気感の故だったのだろうか。僅かに重なった時間が生んだロマンであった。

大正五年三月に出版された廣子の第一歌集『翡翠』（竹柏会出版部）の書評を、芥川が同年六月、『新思潮』に書いたことから二人の縁が繋がる。『芥川龍之介全集』（6）より引用する。

翡翠　片山廣子氏著　芥川龍之介

この作者は、序で佐々木信綱氏も云つてゐる様に在來の境地を離れて、一歩を新しい路に投じ様としてゐる。「曼珠沙華肩にかつぎて白狐たち黄なる夕日にさざめきをどる」と云ふ様な歌が、其過去を代表するものとするならば、「何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり」と云ふ様な歌は、其未來を暗示するものであらう。勿論、後者の様な歌に於ては、表現の形式内容二つながら、この作者は、まだ幼稚である。しかし易きを去つて難きに就いたと云ふ事は、少くとも作者自身にとって、意味のある事に相違ない。そして同時に又この歌集が、他の心の花叢書と撰を異にする所以は、此處に存するのではないかと思ふ。左に二三、すぐれてゐると思ふ歌を擧げて、紹介の責を完する事にしやう。

灌木の枯れたる枝もうすあかう青木に交り霜とけにけり
日の光る木の間にやすむ小雀ら木の葉うごけば尾をふりてゐる
沈丁花さきつづきたる石だたみ静にふみて戸の前に立つ

それから母としての胸懐を歌つた歌に、眞率な愛す可きものが、二三ある。

たゆたはずのぞみ抱きて若き日をのびよと思ふわが幼兒よ
我をしも親とよぶびと二人あり斯く思ふ時こころをさまる

野口米次郎氏の序も、内容に適切である。裝幀は清洒としてゐる。

（啞苦陀）

「在來の境地を離れて、一歩を新しい路に投じ様としてゐる」「易きを去つて難きに就いた」という点を挙げ、更にこの歌集が「他の心の花叢書と撰を異にする」と指摘する。夢想的な表現の中に、近代的な高い意識と内面凝視の理知を織り交ぜた歌集が、この時代、大きく取り上げられることはなかった。廣子はこの後翻訳家として本格的に活躍をするようになり、歌人としての活動は少ない。大正十二年から昭和十年の間は休止状態であった。

寄贈書の芥川からの献辞は、『羅生門』（大正六年）「**片山様**」、『黄雀風』（大正十三年七月）「**片山様**」、『百艸』（大正十三年九月）「**片山夫人**」となり、距離がやや近付いている。

大正十三年夏、芥川は軽井沢のつる屋旅館に滞在し、廣子と交流を持つ。廣子は大正九年に夫を亡くし、二児の母であった。この間、文通は続いている。東京に戻ってからは、食事や観劇を共にしたり、手紙のやりとりが続く。

大正十四年三月の『明星』に、片山廣子への恋の決別を詠んだ、旋頭歌「越びと」を発表する。「越びと」の旋頭歌二十五首（7）は、次のように始まる。

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも、／
　　み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ。
むらぎものわがこころ知る人の戀しも。／
　　み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

廣子への、文学の同志という以上の、年長の女性への切ない思いが綴られる。そして、

門のべの笹吹きすぐる夕風の音、／
　　み雪ふる越路のひともあはれとを聞け。

結びには、二人の間に夕風が吹き過ぎようとしている。芥川は廣子を「かなしき人」（相聞）と愛おしむ。「わが名はいかで惜しむべき。惜しむは君が名のみとよ。」（戀人ぶり）と、才能を惜しみ、「ソロモンは同時に又シバの女王を恐れてゐた。」（三つのなぜ）のだ。関係が深まれば、噛み合い滅びる行く先を見たのであろう。この年の夏、二人は軽井沢で再会している。

『梅・馬・鶯』（大正十五年十二月）「**松村み祢子様**」は、廣子に今後も翻訳で活躍をしてほしいという、芥川からのエールではないだろうか。芥川を詠んだ短歌が残る。

あけがたの雨ふる庭を見てゐたり遠くに人の死ぬとも知らず
　　山川柳子宛書簡（七月二十四日の朝のこと）

亡き友のやどりし部屋に一夜寝て目さむれば聞こゆ小鳥のこゑ
　　『野に住みて』

ごゑ
きみ死にてわれをば教へたまはりぬ人の死ぬるはみづからのため
　　『現代短歌全集』

もろともに路を行かむといひし友の身に添はざりしまぼろしもあはれ
　　『心の花』昭十三・十

古きふみ夜ふけてよめどこのためにいのち死ぬべき思ひはあらず
　　未発表作品

彼の人のすぎにし後は古き書たゞ古き書となりにけるかな

葬送の日、廣子の遺族によって焼かれた芥川からの手紙に、何が書かれていたのか。「もろともに路を行かむといひし友」「このためにいのち死ぬべき思ひはあらず」から推察できる。信条としても、二人の子の将来を思っても、死ぬための恋はできない。廣子もまた〈格闘できる男〉に出会い、妻として母としての枷からひと時解き放たれた。一人の人間として羽ばたくことのできる、書くことへの熱情が甦る。しかし、廣子がどのような困難の中でも求めていたのは、朝になれば聞こえてくる小鳥の声だ。死ぬわけにはいかない。軽井沢つるや旅館の一室で、亡き人を偲ぶ。そして、その人は「みづからのため」に死んだのだと。昭和二年七月の芥川の死を境に、廣子は新たな翻訳を止めてしまう。芥川への思いを封印し、時の経過によって彼からの「古き書」をただの古き書として読めるようになった晩年、廣子は翻訳の仕事を少しずつ再開してゆく。昭和二十七年のことであった。

三　堀辰雄　――　創作ノートとしての短歌

『雉子日記』　河出書房　1940・S15・7・9

『晩夏』　甲鳥書林　1941・S16・9・20　献辞・署名入

「片山廣子様　堀辰雄」

『風立ちぬ』（堀辰雄作品集第三）　角川書店　1946・S21・11・20

『繪はがき』（堀辰雄小品集）　角川書店　1946・S21・7・21　献辞・署名入

「堀辰雄　片山廣子様」

『美しい村』（堀辰雄作品集）　角川書店　1948・S23・10・30

『薔薇』（堀辰雄小品集　別冊）　角川書店　1951・S26・6・15

堀辰雄の献辞・署名の入るのは二冊である。『晩夏』と『繪はがき』は、共に避暑地を舞台にした、詩的な小品である。堀にとっては芥川や廣子と過ごし、文学世界を形作った風土なのだ。廣子をモデルにした幾つかは、寄贈書に含まれていない。

竹内清己『堀辰雄―人と文学』（8）には、「彼の日記（一九二九年）に、「我々ハ《ロマン》を書カナケレバナラヌ。」とある。彼のロマンの原形は「一九二五年夏、軽井沢」に見出した物語を由来とした。（略）「越し人」の師芥川と「日中」の片山広子の物語であって、同時に弟子の彼の物語の事始めだった。」とある。堀辰雄により、「越びと」と短歌「日中」は、「聖家族」「ルウベンスの偽画」「物語の女」等のロマンに甦った。歌が創作ノートとなり、「ロマンの原形」を形作ったとの指摘であろう。

短歌「日中信濃追分にて」は、大正十五年八月号『三田文学』に発表され、蔵書の現代短歌全集　第十九巻や、歌集『野に住みて』に収められる歌であり、芥川と廣子が軽井沢で過ごした濃厚な時間の草いきれが甦ってくるようである。「越びと」廣子にとっても、珠玉の時であった。芥川と廣子との関係を小説にすることで、堀辰雄は作家として道を開く。「物語の女」（9）（昭和九年十月号『文

藝春秋』に発表。改題「楡の家」の第一部として「菜穂子」に収められる。）は、短歌「日中」をまさに創作ノートとした作品である。比較してみよう。以下の論述中、短歌は「日中」、〈　〉中の文章は「物語の女」からの引用である。

われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる
しづかにもまろ葉のみどり葉映るなり「これは山蕗」とおなじことを言ふ
土橋を渡る土橋はゆらぐ草土手をおり来てみればのびろし畑は
われもわれも牧場のけものらと同じやうに静かになりて風に吹かれつつ
をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの代とわかぬ山里のまひるま

「日中」

大正十三年八月十三日、碓氷峠へ車で月見に出掛け、室生犀星、片山廣子、娘の総子が芥川に同行した。八月十九日、芥川と廣子は「つるや」主人と共に追分に行く。

「物語の女」では、芥川を思わせる、小説家の森於菟彦が登場する。O村で避暑をする私と娘の別荘を訪問する。雨上がり、村を案内し、村はずれの分れ道まで来た。

影もなく白き路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ

〈あたかも私たちがそれを待ちでもしてゐたかのやうに、美しい虹がかすかに見えだした。〉（「物語の女」）の場面は、芥川がその日に虹を見た興奮を、犀星へ書き送っている。帰京した森から手紙が届く。〈この頃の気もちは反つて再び二十四五になつたやうな、何やら訳の分らぬ亢奮を感じてゐる位です。〉これは同じ日、芥川が小穴隆一宛の手紙に、「もう一度二五歳になつたやうに興奮している。」と、書き送っている。

二月の末、恋愛詩が送られてくる。「越びと」であろう。〈ばつの悪いやうな〉気になる。

次の夏、二人はまたO村の日ざかりを歩く。〈砂の白く乾いた道の上には私たちの影はほとんど落ちない位だった。ところどころに馬糞が光つてゐた。さうしてその上にはいくつもの小さな蝶がむらがつていた。〉

日の照りの一めんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ

〈私はぼんやりと私たちの足もとにたつた一輪ぽつかりとうす紅い花が咲いてゐるのを見つめてゐた。私は誰といふこともなしに「昼顔・・・」とささやいたやうな気がした。〉

友だちら別れむとして草なかのひるがほの花を見つけたるかな

今は亡き夫が〈生きてゐたらお前にもまた何かの希望が出よう〉と言った言葉が、これまでは〈ただ空虚なものとしか思へないでゐた〉のだ。

君やがて君みづからのためにしも生くる日あらむとおほせたまひし

『心の花』昭和九・七

堀辰雄は、『心の花』昭和九年七月号の廣子のこの歌を、『文藝春秋』同年十月号の「物語の女」に再生させていると言えないであろうか。

竹内清己『堀辰雄と昭和文学』（10）に、作品とモデルの対比が成され、片山廣子は、次のように示されている。「ルウベンスの偽画」（夫人）、「窓」（O夫人）、「聖家族」（細川夫人）、「物語の女」（私・三村夫人）、「かげろふの日記」（母）、「ほととぎす」（私・道綱の母）、「菜穂子」（三村夫人）、「目覚め」（私・三村夫人）、「ふるさとびと」（三村夫人）。

モデルになった廣子は、自分自身だけならまだしも、年頃の娘の総子が堀と恋人同士のように誤解されることを厭い、周囲に説明をして回ったと伝えられている。しかし、息子の文学仲間でもあり、芥川が可愛がった堀辰雄を、素直に応援していた様子もうかがえる。

雨　昭和十三年六月・軽井沢愛宕の奥に堀辰雄氏を訪ふ

風まじり雨降る山に杉皮の家ぬれてゐたり君はいますや

『野に住みて』

むすめらしくほそき姿のわかづまは黒き毛いとの上衣を着たり

フランスの新聞をこまかく裂きて堀辰雄暖炉の火をもす

をんどり

ほのぼのと亡き子を思ひ堀辰雄のあたらしき本けふは読みゐる

『野に住みて』

廣子は「君はいますや」と別荘を行き来する堀辰雄と、長男の達吉と共に統制下の文学について語り合ったという。別荘は昭和六年に米人宣教師ウィンより買い求め、現在は人手に渡るが、建物は保存されている。戦後は「亡き子を思ひ」、堀に息子の姿を重ねたのだろう。堀に先立たれるまで交流していたことが、献辞・署名入の蔵書からも明らかである。

四　与謝野晶子 ―― 「匂ひやかなる」距離

『夢之華』　金尾文淵堂　1906・M39・9・5

『常夏』　大倉書店　1908・M41・7・10

『青海波』　有朋館　1912・M45・1・23

歌集『太陽と薔薇』　アルス　1921・T10・1・10　献辞・署名入

「晶子　片山廣子様　かたはらに」

『白櫻集』（遺歌集）改造社　1942・S17・9・5

歌集『太陽と薔薇』は、寄贈本の晶子の著書の中で一冊だけ、「晶子　片山廣子様かたはらに」の献辞・署名入りである。自序に、「一体に、私の生活の全部が自由画の積りです。殊に前人の規矩に

支配されない私の芸術が其れです。私は自分の個性を自由に表現したいために詩や歌を作ります。」と書く。逸見久美は『鉄幹晶子全集21』（11）に、「『太陽と薔薇』という豪華な対象を、暗雲で覆うような空気がこの歌集には漂っている。（略）一〇年には四月に文化学院開校、一一月には『明星』復刊などの準備に忙殺されていた中での出版であった。」「歌壇の片隅に追いやられながらも晶子の著作出版は旺盛であった。」「しかし四三歳という不惑の年を越えたこの頃は、もはや老いに近づいてゆく年齢でもあった。」として、「太陽と薔薇」を詠む歌を挙げている。所収歌には、廣子の第一歌集名「翡翠」を詠む歌もある。

君とわれ空と水との際よりも匂ひやかなる一線を置く　『太陽と薔薇』

夕立の雨に混りて見ゆるなり翡翠の色のおほとりの羽

山荘の鐘のひびけば艶めかし池の翡翠の人見よと立つ

太陽も稀に疲れて曇るなり淋しきことを知らぬわれかは

夕闇に透かし見るなり薔薇の花いまだ生れぬ世界のごとく

「空と水との際」は、遠目には曖昧でも近づけば明らかだ。「匂ひやかなる一線」とは、その際よりもさらに節度ある程よい距離感であろう。様々な体験が言わしめた言葉である。

「太陽も稀に疲れ」「夕闇」の薔薇だからこそ「透かし見る」瑞々しい世界が見えると言う。

『白櫻集』については、「ふしぎにも「白櫻集」の歌は若かつた日の彼女の歌とは異つたものを伝える」と、廣子は随筆集『燈火節』（5）に記している。

「（源氏をば一人となりて後に書く）紫女わかくわれは然らず」の一首の悲しみは彼女一生のあひだに詠んだといはれる数万首の歌の中にもほかには見出されまいと思はれる。天才と意欲に満ちた彼女が一人となつて老を感じたのであつた。それは私たちが誰でもが感じる老いとは異つたものである。（略）私の姪が彼女の学校に在学してゐたから、私は父兄の一人で、その私に彼女はいつも率直に物を言はれた。師と弟子の間柄ではなく、友人ではなく、社交の仲間でもなく、あつさりと親切に、ごくふつうの話をされた。こだわりのない若々しい勇敢な彼女を知つてゐて、この悲しみの一首を読むことは堪へがたい気持がする。

与謝野晶子は、廣子と同い年である。歌風は違えども、共に様々な困難を越えて来て、晶子の歌の変化に共感を持っている。廣子は大正十二年頃から短歌から遠ざかり、昭和十一年十月「心の花」から再開している。『白櫻集』が、晩年の廣子の歌集『野に住みて』の、深みのある老いの歌に影響を与えているのではないだろうか。

「晶子の歌集を全部大森の家に置いて来たので、私の手もとには遺稿の「白櫻集」だけしかない」とあるので、座右の書にしていたことが分かる。廣子は、晶子の代表歌「劫初よりつくりいとなむ殿堂にわれも黄金の釘ひとつ打つ」を、晶子が老いた自身を鼓舞する歌と読んだのかもしれない。

荻窪にて　なき與謝野晶子夫人のみまへに

筆ほそく晶子と書ける御文をただ一つわが持ちてゐたりし

『野に住みて』

つぽんの三代を貫く歌の橋かけたる人も今は神なる

近代日本の「歌の橋かけたる人」と晶子を尊敬する。大正十年、廣子に贈られた歌集『太陽と薔薇』は、前年に夫と死別し子どもの教育と翻訳に力を注いでいる廣子に、励ましを与え、翌年からの短歌の再開へと働きかけた一冊ではなかっただろうか。

五　佐佐木信綱　――　変わらぬ慕情

『ある老歌人の思ひ出』自伝と交友の面影　朝日新聞社

1953・S28・10・25

献辞・署名

＊佐佐木信綱の自伝。表紙には「片山ぬしへ　昭和廿八年十月廿九日　信綱」とある。

『ある老歌人の思ひ出』（12）に、佐佐木信綱は片山廣子について回想している。

片山廣子さんは、吉田姓の頃からの同人。英文学に堪能で、松村みね子のペンネームで出された、ショオの「船長ブラスバオンドの改宗」には鷗外博士が、シングの「いたづらもの」には、逍遥博士が、ともに、称賛された長文の序を寄せてをられる。心の花にも、愛蘭土文学や、タゴールの詩等を紹介された。源氏物語を心読して国文にもすぐれ、その歌にも清新の気がたゞようてをる。

片山さんにつゞいて、三人のすぐれた特色のある作者が出た。白蓮さんの「踏絵」は、その序文に自分の書いたごとく夢と悩みと憂愁と沈思とのこもつて成つた三百餘首、それを貫いてをる深刻にかつ沈痛な作風には、不朽の生命がある。その情の強さと力とは、萬葉の女歌人狭野弟上娘子をはるかにつぐものともいへる。

信綱は、柳原白蓮の歌集『踏絵』の特質を明確にして高く評価しているのに対し、片山廣子の第一歌集『翡翠』の歌集名をも出さず、アイルランド文学の翻訳家の松村みね子としての活躍を紹介している。その一方で、「心の花」への出詠が少なくなる廣子に、短歌を詠み続けるようにと機会あるごとに励ましていたことが、廣子の書簡などから分かっている。

「清新」と、廣子の歌を評し、同著に、「清新といふことが詩歌の

精神であるといふことは、自分がさきに英詩を学び、訳し試みもしたによつて特に感銘したのであつた。」と述べる。

「心の花（華）」が明治三十一年に創刊され、この年に英語通信社から「英語通信」が出され、「ホトトギス」が発行所を松山から東京へ移している。

自分は、歌人もひろく視野を広げねばならぬといふ考から、文芸上の論文・随筆・小説・戯曲・詩等の創作、海外の作品の翻訳などを、先輩・知友・同人に嘱して掲げなどもした。（中略）鷗外博士が「腰辨當」の名で発表された「有樂門」は、小倉から帰京後の長い沈黙を破られた第一作であつて、引きつゞいて小説を書かれる動機ともなつた作といはれてをる。上田敏博士や蒲原有明君の詩をも掲げた。芥川龍之介君も柳川隆之助の名で、「大川の水」といふ文章や、旋頭歌などを寄せられた。

『ある老歌人の思ひ出』（12）のこのような記述から、片山廣子の翻訳が、「歌人もひろく視野を広げねば」という「心の花」の編集意図に大いに貢献していたことが想像できる。

佐佐木信綱　『佐佐木信綱作歌八十二年』（13）

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門を訪はばや

明治三十二年　二十八歳

青雲をふみております神の手にとりもたしたる白百合の花

片山廣子

わがむねの奥に小さき宮立てゝ君を神としひそかにまつる

『心の花』明治三十九・五

一時に二人みたりをおもふ君御心ひろしほとけに似たり

早春のあけのうつつの眼には見るわが師が老いてひとり住まふ山

『短歌』昭和三十四・九

君がため死ぬべく思ひしこの君のかくながらへてゐますこの世は

未発表作品

廣子にとって信綱は歳も近く、ミッションスクールを卒業して間もない頃の出会いであった。折に触れ励まし続けてくれた師への慕情は、終生変わることがなかったと思われる。

六　古典文学　――　とらわれず生きる

『古今倭歌集』巻八　晩翠軒　1927・S2・4・8

『良寛遺墨集』安田靭彦　監修　第一書房　1928・S3・11・15

『老子解説』　北村佳逸　立命館出版部　1933・S8・11・20

『古今倭歌集』

昭和二年四月の発行である。見事な筆跡の書に、達筆な廣子が手本として購ったと考えられるが、次のような仮説も立てられよう。この年七月、芥川は自殺をする。六月末に芥川は堀辰雄を伴って廣子の自宅を訪問し、永久の別れをした。『古今倭歌集』巻第八の冒

頭は、在原行平朝臣の離別の歌である。「立ち別れいなばの山のみねにおふるまつとし聞かば今帰り来む」百人一首十六番歌として知られる。大正十三年夏、軽井沢にて廣子と交際し、「才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」（『或阿呆の一生』）と興奮した芥川は、室生犀星宛の絵葉書に「左団次はことしは来ねど住吉の松村みね子はきのふ来にけり」と書き送る。

行平の和歌を意識し、修辞法を用いている。芥川からの書簡にも、あるいはこの歌が書かれていたかもしれない。廣子は行平の離別の和歌に、芥川を偲んだと言えないだろうか。

『良寛遺墨集』

廣子の筆跡は良寛によく似る。典雅で勢いのある字である。字を倣い、良寛の歌と生き方までも寄り添い学ぼうとしていたと考えられる。漢学の教養があった良寛は、師の大忍国仙和尚から和歌の手ほどきを受けた。歌風は堂上派で、二条家歌学の系統である。廣子の祖父そして母も二条派の歌を学んでいたという。『定本　良寛全集』（14）解説に、良寛は因襲的な歌づくりに飽き『万葉集』に傾倒してゆき、歌の特徴として一に枕詞の多さ、二に三句切れの歌の多さ、三に倒置法の多用、四と五は、接続助詞「つつ」と、助詞「の」の多用による音調美を挙げる。

いにしへを思へば夢かうつつかも夜は時雨の雨を聞きつつ

良寛歌集『ふるさと』

この里に手まりつきつつ子どもらと遊ぶ春日は暮れずともよし

謡曲「江口」にもなる、西行が遊女と和歌を交わした「いにしへ」を思い、「夢かうつつかも」「時雨の雨を聞きつつ」一夜を眠る。西行の生き方を慕い、「子どもらと遊ぶ」童心を持つ。書などの才能に溢れていたが、自らの才にとらわれることはなかったという。

『老子解説』

この書の、次の八、九ページに、誰の行為か定かではないが短歌の月報が挿んであった。

第二章　天下皆知　八十八言

天下皆知美之為美、斯悪已。皆知善之為善、斯不善已。

天下みな美の美たるを知れば、斯れ悪のみ。皆善の善たるを知れば、斯れ不善のみ。

「天下の総ての人が、美しいものを見て美に一致すれば悪いものとなる。総ての人が善事を善しとしてそれを認めるやうになつて人が模倣すれば偽善と混合して善も不善となる。」との解説を読めば、「群集心理は衆愚心理であつて軽率から発する」から、人は争って偽善を装い、個性を離れてゆく。老子が周の史官でありながら、史実を説の根拠にせず、固有名詞は嫌ったとする。孤高の歌人といわれ、文壇、歌壇から距離を置いた廣子は、老子に共感するところを感じたのではないだろうか。第二歌集は『野に住みて』としている。

『世界の名著』老子と荘子（15）によると、「『老子』も、『荘子』

と同じく「自然」や「無為」を唱えはするが、その書には政治への関心が強くあらわれている。」「その文体は凝縮され、逆説的な警句で満たされ、脚韻をふんだ部分の多いことも相まって、特殊な美文というべく、しかも読者を深く考えこませる力をもっている。恐ろしく雄弁な『荘子』とちがって、『老子』はぽつりぽつり途切れがちに語るのだがやはり読者をひきこまずにはおかない。」とある。廣子が無口なため、室生犀星が「クチナシ夫人」と渾名を付けた。何故「老子」なのか。廣子は過去に拘泥しては、生きていけなかったのだろう。寡婦であり、「越びと」や堀辰雄の小説のモデルとして好奇の目で見られることは、スタイリストの彼女としては、さぞや生きづらかったことであろう。

すぎし世の古りたる物は捨てもせむ吾みづからをわれは負ひつつ　『野に住みて』

もろもろの悲しき事もあやまちも過ぎたるものは過ぎ去りしめむ

のびのびと無為に一生を過し来てそのまま吾は眠らむと思ひし

生きるかひあるかと問はじ天地の一つの生命をわれ今日も愛す

古典文学の蔵書からは、昭和二年の芥川との永別の悲しみを、古今和歌集の「離別」の歌に重ねたことが読み取れる。「古りたる物」や「悲しき事」「あやまち」を捨て去っても、「みづからをわれは負」う覚悟はできている。そして、良寛、老子の物事にとらわれない精神世界に心惹かれる廣子がいる。信綱に教えを受けた「源氏物語」に始まり、これらの古典からも、対象を澄み透った眼で見つめる独自の歌の世界を形成していった。

七　片山廣子　――　野へ向かう心

歌集『翡翠』　竹柏会出版部　1916・T5・3・25　献辞・署名入

保坂氏は、次のように解説をしている。

＊〝心の華叢書〟の一冊として刊行されたもので、片山廣子の第一歌集。図書室の蔵書印の「昭和8ねん9月12日」の確認ができ、生前に廣子自身が寄贈したものであることがわかる。ちょうど廣子が『東洋英和女学校五十年史』の編纂委員として母校に関わっていたころに寄贈されたものか。「むかしわれ神の教を学びつる麻布のすみの灰色の家」はこのなかの一首。　「廣子　東洋英和女学校　ライブラリイへ」

この他、自著の『燈火節』『野に住みて』、翻訳本数冊が寄贈されている。また、昭和六年度　東洋英和女学校同窓会報に、「大森のうた」が掲載されている。母校へは、同窓の村岡花子と違い深く関わることはなかったと聞くが、この頃は廣子の姿が見えている。

大森のうた　片山廣子　（昭和六年九月『現代短歌全集』第十九巻）

（ふるき詠草より）　昭和六年度　東洋英和女学校同窓会報（16）

かり穂ほす大野あゆめばうすら日のもや和らかう心ぬくもる

ゆすぶるるぺんぺん草の根のあたり虫とびはねてつゆけかりけり

ゆふぐもる冬菜の畑のくろつちに男ひとりゐて菜をたばねつつ

頬さむく坂をおりつつ枯枝の木の間にとほきゆふやけを見る

わたり鳥ゆくかな空をはるばると我つかれつつ門入りくれば

くもり日の秋の日消ゆるたそがれにばらしろじろと浮きてぞみゆる

はだしの子三四人して椎ひろふわが生垣のそとのほそみち

しばらくは短歌から遠ざかっていた廣子だが、その辺の心境を述べているのが次の書である。

『現代短歌全集』 第十九巻　平野萬里（著者代表）改造社　1931・S6・9・15（17）

後記　片山廣子

大正五年に歌集「翡翠」を出した前後まで私は歌に熱心であつたやうだが、その翌年あたりからだんだん作らなくなつてしまつた。これはちやうどその時分から外国の翻訳に興味をもち始めた為もあり、また熱情のない自分が次第にマンネリズムに堕してゆくのに自分ながら不満を持つたためもあらう。

大正七八年ごろに作つたものは私がアイルランド民謡のなかでよみなれた即興詩風のものでそれもごく僅かしかない。それから後の十何年まるきり歌に縁なきものとなつてゐた。いま十日ばかりの日数で過去の歌全部を揃へようとしてみたが僅か百数首しかみあたらない。それを選んだりするとなほ少なくなるから、殆ど全部をそのまま入れることにした。

過去のある時竹柏園門下で歌を学んだといふそれだけのことで私のあまり僅少な作品を専門家のもののあひだに並べるのは、すこし厚かましく思はれるけれど、今後私が歌集を出す希望もないのだし、今の機会に自分の歌をまとめておいた方がいいやうに思つて編輯者の好意を御遠慮しないことにした。

集中。「日中」が大正十四年、「六里が原」が十五年作、間島氏におくる歌が昭和三年作、その後今日まで一首もない。「百合」の歌が大正七年頃の作で「翡翠」の歌のつぎに古いものであり、そのほかはそのあひだにはさまるものである。「生死」「夕」の二つは大正九年である。「大森のうた」はをりをりに作つたものをあはせてあるから時が分からない。大ていは大正八年ぐらゐまでと思ふ。

廣子は「アイルランド民謡雑感」（18）の中で、「アイルランド人は昔から言葉の天才といはれ、アイルランドは詩の国と呼ばれて来た。（略）アイルランドの詩も書斎の詩人の言葉や書かれたリズムを真似ることを止め、民謡をきき民謡の言葉を学ぶことによつて復活したのであつた。」と述べ、現実的な生きた言葉の世界から詩をつくり出すことを、アイルランド文学の翻訳を通して身に付けていったものと思われる。

母校である東洋英和女学院の五十年史に寄せたのは、恩師の思い出であった。女学校時代の数少ない資料として貴重な一文である。

ミス・マンローのこと　　片山廣子

昭和9年　東洋英和女学校五十年史（19）

（略）先生は文学を愛好され詩が殊にお好きのやうでした。「英文学」といふ時間の二年のあひだに教へていただいたのは、シェリィの「西風の譜」「プロミシウス、アンバオンド」またバアンズの「野菊に」「ねずみ」などで、ことにお好きで長時間を割いて下さったのは、ブライアントの「曠野（プレイリース）」の詩でした。何十年を隔てた今でも、草野をはしる風の音を先生のお聲のなかに思ひ起します。先生御自身も教師の天職にそれほど一途でゐられなかつたら、詩人になつてをられたのかもしれません。詩人のたましひを持つてをられた為に、何時も言葉ずくなで、それが先生の教室に於けるお言葉を、誰のよりも単純に力づよくきこえさせたものとおもひます。西洋風の女子教育熱がおとろへ、女の子は学校を下げて、お花や裁縫のけいこばかりさせるといふ時代に、さういふ学者はだの先生が、校長としてどんなに奮闘なさつたかは、その時分の生徒たちがいつも思ひ出して、心にお禮を申すばかりです。

東洋英和の教育水準の高さと共に、時代の中で女子教育が難しい局面にあったことがわかる。それと同時に、戦後になって国と社会に対して懐疑的な思いの歌を詠んでいる廣子の考えの片鱗が、この頃からすでにあったといえる。

廣子は、昭和十一年頃から再び『心の花』の歌を出詠するようになる。十数年のブランクを経てのことである。師の信綱の熱心な勧めがあっての復帰となった。『新萬葉集』には、第一歌集『翡翠』の後の歌も収められ、晩年の第二歌集『野に住みて』に続いていく。一部を挙げてみる。

『新萬葉集』　第二・五・六・八　改造社編　改造社

1938・S13・3・27～8・20（20）

女らはほそき帯して物くへりあひるの騒ぐとなりの家に

（以下二首『翡翠』）

一すぢの我が落髪を手にとれば小蛇のごとく尾をまきにけり

人なくなりしのちに

なほりなばうれしからむと君いひしその細きこゑ夜も日もきこゆ

子ら二人われと向ひて茶をのめば父かへり給ふ夜のごとくおもふ

わかき日のさびしきをりに祈りつるその神々のとほくおもはる

軽井沢なる野沢原に住みて

高原は夜ぎりにしづみわが上に星の夜ぞらのちかくより来る

信濃追分にあそびて

板屋根のふるびしづかなる町なかにただ一羽とぶつばめを見にけり

（以下、「七月の」の歌までは『野に住みて』）

さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけりけふの青ぞらの中に

鎌倉極楽寺にて

樹々うもれ風たちさわぐすすき山けものの通る道を見にけり

谷かこむ山の樹すがしわれやがてここに住まむと人はいひしも

軽井沢にありて

葦原のなかの砂地にたちとまり人がうしろから来るやうにおもふ

わが傘のみ一つみゆるかとこころづき葦原のなかに傘たたみたり

七月の青きいのちはすさまじく馬越の原に葦さやぐなり

さびしさをたのしとおもふ野鳥らのあそびかくるる野のなかにわれは

雨やみてあかしやの葉のつゆふかき矢が崎橋をわがわたるなり

とんぼらは砂地にひくく飛びゐたり物の影なく曇るまひるま

『翡翠』の、野に飛び立ちたいと夢想や強い情念を思わせた歌に比べると、後の歌は「野のなかにわれは」ある。「板屋根の」「さびしさの」など自由律もあり、この頃は、時代的な影響が感じられる。「けものの通る道」を見たような気もするし、亡き人が「うしろから来るやうに」も思える。作者は現実に立ち返り「傘をたたみ」、今の「さびしさをたのしとおもふ」心境に入りつつある。叙景歌にも心象がきっちりと詠まれ、くどくなく、深みのあるしみじみとした情感が伝わる。しかし、時代は戦争に突入し、終戦直前には長男が病死する。多くの別れと自らの病など、廣子はまだまだ厳しい試練を与えられる。

八　その他の人と作品　――　歌の変貌

『戀愛名歌集』萩原朔太郎　選評　第一書房　1931・S6・5・15

『寫生文集　帆立貝』阪本四方太・高濱清　俳書堂　1906・M39・3・25

『小歌論』（アララギ叢書第110編）斎藤茂吉　第一書房　1943・S18・12・20

『戀愛名歌集』（21）序言に、萩原朔太郎は「日本語の韻律は柔軟で不規則であり、叙事詩の如きがッしりした建築的韻文の構成に適しない。（略）萬葉集等の歌は極めて高級な芸術であり、洗練された文化的表現を盡して居る故、この方の見地で見れば、或は短詩形の先端を行く、世界の最も進歩した抒情詩とも言へるであろう」と述べる。柔軟で不規則韻の日本語の特殊な性質と抒情性の高さを言い、「構成し得る最上の韻文である」短歌以外の和歌や新体詩や自

由詩を批判し、西洋の詩にも勝る、歌の不易を説いている。

『小歌論』（22）の斎藤茂吉は、「短歌道一家言」に「実相に観入しておのづから歌ひあぐるのが即ち歌である。これを『写生』と謂ふ。『写生』とは実相実相と行くことである。生はイノチの義である。（略）写生した一首が象徴的になつてゐるか、深秘の境に到達してゐるか、それは『写生』を実行した一首の歌について吟味すべきであって、歌つくりの覚悟として、はじめより、象徴、深秘を狙うのはあぶないと思ふのである。」との記述があり、廣子は、第一歌集『翡翠』時代の自らの歌を当て嵌めてこのくだりを読んだと思われる。

『ある老歌人の思ひ出』（12）に、佐佐木信綱が「心の花」創刊以降について記述する。

翌三十二年には、鶯蛙吟社の「詞林」と合同して、岡麓・香取秀眞の二君が、編輯に加はられた。かうした縁から、第三巻以後は、竹の里人や伊藤左千夫君などの論文作品が掲載せられるやうになつた。その頃、石槫君の同郷で根岸派なる森田義郎君が編輯を担当されたので、一時は、根岸色が濃厚になつたが、第八巻から石槫君一人の編輯となつた。それ以来、その歿せられる昭和十七年まで、約五十年の間、献身的に実によく尽くしてくれたのであつた。

信綱は旧派和歌の題詠を離れた、自由で個性的な「おのがじしに」の考えから、「写生」を採りいれた。その指導を受ける廣子は、抒情性と柔軟不規則韻律の歌の不易を説く萩原朔太郎の『戀愛名歌集』も、写生写実の『寫生文集』も、実相観入を説く斎藤茂吉の『小歌論』をも読み、多様な歌風に興味を持っていたことが、蔵書に残されているのである。

信綱は更に、

深みのある、内容豊かな美を、和歌といふ短詩型文学の内に見出して培ひ育てた功において、明治の和歌革新運動は、新古今時代を樹立した精神にひけをとるまいと信ずる。正岡君のいはれた「写生」も、さういう深みにおいて万象の真実の相を偽はらずに描きいづることであつたと思ふ。

と、「写生」についての考えを示す。廣子の歌が思索的な心象詠から、晩年の自然体を感じさせる生活詠へと変化してゆく上で、信綱の考えやこれらの蔵書からの影響考えられる。また、昭和二年八月八日付書簡（山川柳子宛）（23）の中で、廣子が興味深いことを書いている。

一昨年の八月末にわたくしは元気のいい芥川さんに軽井沢でお別れして帰りました。九月に東京でまたみんなにぎやかに会いませうとお約束したのがそれきりのびてしまいました。十一月ごろ追分のうたのしたがきをお見まひのつもりでお送りしましたら、あなたはアララギがきらひのくせにアララギそつくりですとひやかされました。

大正十三年七月二十八日、軽井沢の芥川から室生犀星宛の絵葉書（24）には、「左団次はことしは来ねど住吉の松村みね子はきのふ来にけり　二伸　クチナシの句ウマイナアと思ひましたボクにはとても出来ない」と書き送っている。芥川は、廣子が『翡翠』の歌から脱して、新しい歌風を持ちつつあることを感じ取っていたのであろう。

九　まとめ　――「寄贈本」から見えてくるもの

寄贈本の中で、廣子宛てに献じられた本からは、芥川龍之介、堀辰雄、与謝野晶子、佐佐木信綱らとの交流関係が見えてくる。また、寄贈本から推察できる大切な点は、廣子の読書姿勢であろう。何を求め何を学び取ろうとしていたのかが重要である。文学ばかりでなく、生き方を模索する読書姿勢が見えてきた。日本の古典から外国のものまで、好みのものから相対するものまで、幅広い興味と関心で内面世界を深めようと心掛けている。

ここで考えたいのは、寄贈本に含まれていない蔵書である。洋書の一部は、戦火から守るために長男の家の庭に埋められていたという。「晶子の歌集を全部大森の家に置いて来たので、私の手もとには遺稿の「白櫻集」だけしかない」と『燈火節』にあり、歌集評を書いた柳原白蓮の歌集『踏絵』にしても、村岡花子の翻訳本も、或いは戦火によって失われたかもしれない。寄贈本が廣子の蔵書の総てではないことは言えるであろう。

廣子亡きあと、川田順は『短歌研究』（昭和三十二年五月）（25）に「理知と狂熱　片山廣子さんのこと」と題して次のようなことを述べている。「表面は静かだが、内面はかなり複雑な女性だつたと思ふ。（略）長い交際の間にも、口をあけて笑つたことはなかつた。微かに皮肉（？）に笑ふ。」「廣子さん自身では自分の生活を〈理知と狂熱の争い〉と言つたさうだが（略）何事にも、狂熱に達する一歩手前で自分を反省する生活と云つた方が当つてゐないか？　あれだけの教養と、あれだけの才分を持ちながら、文学へも狂熱したことはない。短歌が上手（新しかつた）でありながら、没頭しなかつた。」と書いた後に、アイルランド文学の翻訳も忘れたような顔であつたとある。「歌壇のいやなところ、文壇のいやなところを知りぬいて遠ざかったのかもしれぬ。それも〈かもしれぬ〉で本当のことはわからない。佐佐木先生へも近寄らなかつた。それもなぜだか判明しない。どうも底の知れぬ婦人であつた。」そして、「波けぶる鮫津の里のむらさめに肩ぬらしゆく若き瞽女かな」の廣子の歌を佳い作と言うと「人間は結局この瞽女のやうなものです」と応えたと結ぶ。若い女流歌人に「こわい」と感じさせたという、廣子の冷静な姿が映し出されている。

その一方で、若い歌人に懇切丁寧に短歌の歌評を伝えたり、金銭的な面で援助をしたりしている。村岡花子が幼い長男を疫痢で亡くした際、原書を渡していた『王子と乞食』の翻訳を勧め励ましたのは廣子である。花子たちが関東大震災から立ち上がろうと、印刷出

版の会社を再建する際、多額の資金を用立てることもしている。早逝した夫、芥川の死、息子との逆縁、身近な人達との多くの別れを持つ。戦中、戦後の時代の生活の厳しさも加わり、知と情は「底知れぬ」深さを養い、晩年の短歌世界を拓いていったと考えられる。

久松潜一は、『心の花』「『野に住みて』を読みて」（26）に、次のように書いている。

平易な詞と日常的な素材によって淡々と歌いこなされている、それでゐて読んで深い感動を覚えたのは、技術を越えた人間性の深さにあると言へるのであらうか。技術と人間性が一になつてしまつたとも言へる。さうして人間性といふ点から言へば、感情の鋭さも抑えられ、知性のひらめきも枯淡となつてよき意味の老境の文学となつている。それでゐて決して固定しないみづみづしさがある。

歌人としての、『翡翠』から『野に住みて』の歌集の大きな変化は、①生活者としての体験からの、人間的成長。②翻訳家として、伝わりやすい表現を心掛けたこと。③現実的な生きた言葉の世界から即興詩をつくり出す、アイルランド民謡からの影響。④生き方を模索する幅広い読書姿勢等があろう。若き日の自由な羽ばたきに焦がれる思索的な歌に、晩年の「老境の文学」ともいえる透明感ある生活詠に、現代に通じる古びない感性がある。

『翡翠』大正五年・三十八歳

何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり

いく春か花は散りけむ眼を閉ぢて人の掟てし道を行く間に

我が世にもつくづくあきぬ海賊の船など来たれ胸さわがしに

よろこびかのぞみか我にふと来る翡翠の羽のかろきはばたき

『野に住みて』昭和二十九年・七十六歳

待つといふ一つのことを教へられわれ髪しろき老に入るなり

動物は孤食すと聞けり年ながくひとり住みつつ一人ものを食へり

わが側に人ゐるならねどゐるやうに一つのりんご卓の上に置く

寄贈書から、表現面では初期から、写生、写実に関心を持っていることが分かった。個性を尊重する「心の花」の歌風。更に良寛、老子のとらわれない精神世界に心惹かれる廣子。群れることを嫌い、曠野に住むことに憧れ、自然体を貫いた歌人と言えるのであろう。

東洋英和女学院史料室所蔵の「片山廣子氏寄贈本」百十四冊を閲覧させていただき、感謝申し上げたい。これらの資料から、短歌世界を形作った片山廣子像がおぼろげながらも見えてくる。今後の「片山廣子の短歌」の研究に更に役立ててゆく所存である。

十　資料（片山廣子氏寄贈本）東洋英和女学院史料室だより No.67

東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」一覧

＊年数は資料の算用数字のままとする。

書名	著者・編者［訳者］	発行	発行年月日（特記事項	片山印）
現代短歌全集 第十九巻	平野萬里（著者代表）	改造社	1931・S6・9・15	
羅生門	芥川龍之介		1917・T6・5・13	
影燈籠	阿蘭陀書房		献辞入りの名刺	
春服	芥川龍之介	春陽堂	1920・T9・1・28	
黄雀風	芥川龍之介	春陽堂	1923・T12・5・23（第4版）	
百艸	芥川龍之介	新潮社	1924・T13・7・18	献辞・署名入
支那游記	芥川龍之介	新潮社	1924・T13・9・17	献辞・署名入
梅・馬・鶯（芥川龍之介随筆集）	芥川龍之介	改造社	1925・T14・11・3	
牡丹のある家	芥川龍之介	新潮社	1926・T15・12・25	献辞・署名入
雉子日記	窪川稲子	中央公論社	1934・S9・8・3	献辞・署名入
晩夏	堀辰雄	河出書房	1940・S15・7・9	
風立ちぬ（堀辰雄作品集第三）	堀辰雄	甲鳥書林	1941・S16・9・20	献辞・署名入
繪はがき（堀辰雄小品集）	堀辰雄	角川書店	1946・S21・11・20	献辞・署名入
美しい村（堀辰雄作品集）	堀辰雄	角川書店	1946・S21・7・21	献辞・署名入
薔薇（堀辰雄小品集 別冊）	堀辰雄	角川書店	1948・S23・10・30	献辞・署名入
夢之華	堀辰雄	角川書店	1951・S26・6・15	
常夏	與謝野晶子	金尾文淵堂	1906・M39・9・5	
青海波	與謝野晶子	大倉書店	1908・M41・7・10	
歌集 太陽と薔薇	與謝野晶子	有朋館	1912・M45・1・23	
白櫻集（遺歌集）	與謝野晶子	アルス	1921・T10・1・10	献辞・署名入
日本古典全集第二回	與謝野晶子	改造社	1942・S17・9・5	
徒然艸	與謝野寛・正京敦夫・與謝野晶子編	日本古典全集刊行会	1926・S1・12・31	
グウルモンの言葉	グウルモン	堀口大学訳 第一書房	1931・S6・9・17	献辞・署名入

ソヴェト紀行修正　アンドレ・ジット　小松清訳　第一書房　1937・S12・11・10

ソヴェト旅行記　アンドレ・ジット　小松清訳　第一書房　1937・S12・3・20

定本　吉野朝の悲歌　川田順　第一書房　1939・S14・9・20

川田順全歌集　川田順　中央公論社　1952・S27・6・10　署名入

歌集　文人畫風　日夏耿之介　関書院　1947・S22・8・25　献辞・署名入

ある老歌人の思ひ出　佐佐木信綱　1953・S28・10・25

自伝と交友の面影　朝日新聞社

献辞・署名入　水原秋櫻子　1939・S14・1・25

随筆　新雪集　第一書房

三代　俳句鑑賞　水原秋櫻子　1942・S17・10・20

春夏の巻　第一書房

立山群峯　冠松次郎　第一書房　1929・S4・6・1（第2版）

黒部　冠松次郎　第一書房　1930・S5・5・18

高瀬川　高倉輝　ロゴス書院　1930・S5・11・20

編集者の発言　池島信平　1955・S30・2・20

暮しの手帖社

八雲　第二輯　川端康成　他　1943・S18・6・15

歌集　春の岬　編　小山書店　1939・S14・4・5

（紅葉山人遺稿）　三好達治　創元社　1904・M37・10・21

蕉門十哲句選　他　尾崎紅葉　選　国民書院

戀愛名歌集　萩原朔太郎　選評　1931・S6・5・15

黄金杯　第一書房　J・ワッサーマン　1910・M43・1・1

日本藝能史六講　森林太郎訳　春陽堂

石川啄木　折口信夫　三教書院　1944・S19・3・10

（現代叢書39）　兼常清佐　三笠書房　1943・S18・8・15

天皇歌集　みやまきりしま　1951・S26・11・3

寫生文集　帆立貝　毎日新聞社

藤蔓冊子　阪本四方太・高濱清　1906・M39・3・25

俳書堂

上田秋成（宮崎三昧校訂）　1909・M42・4・8

日吉丸書房

新萬葉集　第二・五・改造社編　改造社　1938・S13・3・27〜8・20

六・八

巴里と東京　福島慶子　1951・S26・6・10

暮しの手帖社

小歌論（アララギ叢書斎藤茂吉　第一書房　1943・S18・12・20
第110編）
有史以前の日本　鳥居龍蔵　磯部甲陽堂　1918・T7・7・20
斷片　ノヴァーリス　飯田安訳　第一書房　1931・S6・12・20
微生物を追う人々　ポール・ド・クライフ　秋元壽惠夫訳　第一書房　1942・S17・4・20
近代劇全集　全43巻　第一書房　1927・S2～
（欠本1）・別巻1　1930・S5
夢十夜　夏目漱石　春陽堂　1924・T13・3・15（第82版）
堤中納言集　東京美術書院　1926・T15・11・25
古今倭歌集　巻第八　晩翠軒　1927・S2・4・8
良寛遺墨集　安田靭彦　監修　第一書房　1928・S3・11・15
老子解説　北村佳逸　1933・S8・11・20
金鈴餘響　立命館出版部　佐佐木信綱　編　1937・S12・6・13
古今和歌集　巻第十七鳩居堂　竹柏会　1940・S15・9・5
市川左団次　松居桃楼　編　1941・S16・2・23
尚古法帖　第十八　高橋登美　行成卿
（版本）
歌集　翡翠　片山廣子　1916・T5・3・2
竹柏会出版部　5献辞・署名入
キリスト聖語読本　佐野勝也　第一書房　1937・S12・10・15
大地　第三部　パールバック　1939・S14・8・10
新居格訳　第一書房
堀辰雄（日本文学アル中村真一郎　編集　1954・S29・9・28
バム4）　筑摩書房
義眼殺人事件　S・ガードナー　1956・S31・2・15
砧一郎訳　早川書房
赤毛館の秘密　A・A・ミルン　1956・S31・4・29
（探偵小説文庫）　大門一男訳
（以上114冊）

注・参考資料

（1）東洋英和女学院史料室だよりNo.67　保坂綾子「東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」について」（二〇〇六・十一・東洋英和女学院史料室委員会）7～9頁

（2）藤田福夫「増補片山廣子年譜と明治大正期作品抄」（一九七五・十・金沢大学語学文学研究）

（3）片山廣子　松村みね子『野に住みて』短歌集＋資料編（二〇〇六・四・月曜社）
（4）秋谷美保子編『片山廣子全歌集』（二〇一二・四・現代短歌社）
（5）片山廣子　随筆集『燈火節』（一九五三・六・暮しの手帖社）138～139頁、170～171頁
（6）『芥川龍之介全集第一巻』「翡翠」（一九七七・七・岩波書店）183頁
（7）『芥川龍之介全集第九巻』「越びと」（一九七八・四・岩波書店）437～442頁
（8）竹内清己『堀辰雄―人と文学』（二〇〇四・十二・勉誠出版）24頁
（9）『堀辰雄全集第一巻』「物語の女」（一九七七・五・筑摩書房）397～423頁
（10）竹内清己『堀辰雄と昭和文学』（一九九二・六・三弥井書店）98頁
（11）逸見久美編『鉄幹晶子全集21』「太陽と薔薇」（二〇〇六・七・勉誠出版）2頁、312頁
（12）佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出』自伝と交友の面影（一九五三・十・朝日新聞社）103～104頁、99頁、41頁
（13）佐佐木信綱『佐佐木信綱　作歌八十二年』（一九九九・十二・日本図書センター）52頁
（14）内山知成編『定本良寛全集』第二巻歌集（二〇〇六・十一・中央公論新社）10～12頁
（15）小川環樹編『世界の名著』老子と荘子（一九六八・七・中央公論社）8～9頁
（16）昭和六年度　東洋英和女学校同窓会会報（一九三一・十二・東洋英和女学校）1頁
（17）平野萬里（著者代表）『現代短歌全集　第十九巻』（一九三一・九・改造社）415～416頁
（18）『短歌研究』第四巻第十二号「アイルランド民謡雑感」（一九三七・十二・改造社）／片山廣子　松村みね子『燈火節』随筆＋小説集（二〇〇四・十一・月曜社）369～375頁
（19）東洋英和女学校五十年史（一九三四・十二・東洋英和女学校）182～184頁
（20）改造社編『新萬葉集　第二』（一九三八・三・改造社）249～252頁
（21）萩原朔太郎　選評『戀愛名歌集』（一九三一・五・第一書房）3～8ページ
（22）斎藤茂吉『小歌論』アララギ叢書第110編（一九四三・十二・第一書房）18～20頁
（23）片山廣子書簡四　山川柳子宛昭和二年八月八日（一九九六・二軽井沢高原文庫第三十号）7頁
（24）『芥川龍之介全集第十一巻』書簡二（一九七八・六・岩波書店）328頁
（25）片山廣子　松村みね子『野に住みて』短歌集＋資料編　川田順「理知と狂熱　片山廣子さんのこと」（二〇〇六・四・月曜社）565～567頁
（26）『心の花』第五十九巻第十号　久松潜一「『野に住みて』を読みて」（一九五四・十・竹柏会出版部）619頁

Hiroko Katayama's Tanka : Now Accessible from a Donation to Toyo Eiwa Jogakuin

SHIMIZU, Mariko

Hiroko Katayama, a poet with "Kokoro no Hana", first came to be known under the name of "Mineko Matsumura" from her work as a translator of Irish literature. The likes of Ougai Mori, Bin Ueda and Kan Kikuchi rated her highly from such work. For a while, Hiroko ceased all work as a translator and stopped composing tanka. With the exception of her translated works, only two anthologies of her poetry ("Kawasemi" and "No ni Sumite") and one collection of essays ("Toukasetsu") remain. Hiroko had plenty of correspondence with Ryuunosuke Akutagawa, Saisei Murou, Tatsuo Hori, and Sadanji Ichikawa. She often tends to be regarded only as Akutagawa's last lover and his inspiration for "Koshibito", but her own poetry possesses a timeless and introspective quality and often isn't fully understood or appreciated. In March 2014, the archives of Toyo Eiwa Jogakuin had the pleasure of making available 114 books that had been donated by the family of Hiroko Katayama. The thoughts and personality of Hiroko Katayama impart unique qualities to these works, and thanks to this collection, one may now have a glimpse at and reflect upon the world formed by her tanka.

Keyword :
Hiroko Katayama
Tanka
Toyo Eiwa Jogakuin
Donation
Translator
Ryuunosuke Akutagawa